

沖縄市から学ぶ「平和」―基地の街の記憶を通して

山崎 孝史

大阪公立大学大学院文学研究科教授

はじめに

筆者は本土出身者であり、琉球・沖縄史を学ぶ意義は、日本という国民国家の近現代史における矛盾と教訓を知り、その望ましい将来像について、沖縄県を含めて考えることにありと捉えてきた。したがって、沖縄市から「学ぶ」というのは、本土からの行為であるが、学ぶ過程では、学ばれる対象（沖縄社会）からの問い返しもありうる。本稿では、そうした問い返しの可能性に留意しつつ、「学ぶ」という立ち位置から論じていきたい。

次に「平和」は、一般的には「戦争がない状態」と定義される。沖縄戦を通して伝えられてきたのは、この意味での「平和」であろう。しかし、沖縄市から学ぶ「平和」は、単に「戦争がない状態」ではない。この「平和」はもっと複雑で矛盾している。なぜなら、沖縄市から「平和」を考えることは、誰の「平和」を維持するために、誰がその負担や苦悩を担ってきたのかという問題に向き合うことになるからである。

こうした問題意識から、本稿は沖縄市、とりわけ米空軍嘉手納基地に接する旧コザ市地区の成立とその政治地理的特性を

検討し、その「類まれな」都市性に基づく地域資源の活用について考え、沖縄市の戦後史から学びうる「平和」について論じてみたい。繰り返すが、米軍基地の街の戦後史は矛盾に満ちている。本土の人々が沖縄市との結びつきを想起する場合、この矛盾から本土の「平和」がもたらされたことを、まず自分事として理解することから始めるべきであろう。

コザ市の誕生

～境界都市とコンタクト・ゾーン

沖縄市は1974年にコザ市と美里村が合併して成立する。コザ市の前身は越来^{こえく}村と呼ばれる農村であった。越来村には1944年に開設された日本軍「中飛行場」があったが、沖縄戦で米軍に接収され、戦後に嘉手納空軍基地（以下「嘉手納基地」）へと転用・拡充された。沖縄島中部で米軍基地の建設が進むと、基地経済の拡大に伴い、越来村は都市化し、1956年にコザ市となる。「コザ」という地名は、沖縄上陸後に米軍が「古謝^{こじや}」や「胡屋^{こや}」をKozuと誤記したことに由来するとされる¹。

コザ市は、農村から分化した「普通の」都市ではなく、基地建設（土地接収）によ

り土地から切り離された労働力が、基地経済（雇用とサービス需要）に吸収された結果である。米軍基地の街といえば、横須賀市やかつてのソウル市梨泰院^{イテウォン}があるが、これらは首都圏にある。島嶼^{とうしょ}の米軍基地としてはグアムやプエルトリコの例があるが、そこにコザ市ほどの規模の街はない。その点でコザ市は「類まれな」基地の街である。

コザ市域は、嘉手納基地を含む複数の軍事施設によって、その60%以上を占有され、広大な「軍」の空間と狭小な「民」の空間に二分された。1970年代の嘉手納基地の面積は約21km²、駐留する米軍関係者の数は約33,400人に上った²。嘉手納基地は、滑走路や格納庫などの軍事施設に加え、住宅・学校・病院・商業施設・ゴルフ場など民生施設を含む巨大な「アメリカ・タウン」を形成した³。つまり、沖縄島中部では基地の周囲に沖縄社会が再配置され、この軍と民の空間を分離したのが基地のフェンスとゲートであった。

これら広大な基地群の建設は、西太平洋における米国の軍事戦略の一環であったが、沖縄の人々に必要な就業機会も提供した。また、米軍は軍道ほかのインフラを整備したので、基地周辺に沖縄の人々が集住し、基地の街が形成された（図1）。



図1 嘉手納基地（左上）と旧コザ市域（出典：Google Earth）

コザ市の場合、軍道の敷設により生まれたコザ十字路と胡屋十字路、そして嘉手納基地門前の「第2ゲート通り」（ゲート通り）とその北東側に新設された「ビジネス・センター通り」（センター通り）を中心に、米軍向けの飲食・風俗店街（特飲街）が族生する。こうして、沖縄島中部の社会は軍雇用、対基地サービス、軍用地料などを介して基地経済に依存していったのである。

つまり、コザ市の形成は米軍による沖縄島の要塞化に沿うが、その地理的形態は基地のフェンスとゲート（擬似的国境）に接する「境界都市」といえる。一般的に境界は空間を分割し、境界をまたぐ相互作用を制御する手段として用いられる⁴。特に国境は国家の領土を縁取り、防衛の前線となるとともに、自己／他者、内／外という二分法を生みだし、国境と関わる主体のアイデンティティにも影響する⁵。また、国境は社会を分離しつつ、接触もさせる。つまり、国境は隣国とのヒトやモノの流れを

制御するが、この流れによって国境地域には複雑な社会的動態が現れる⁶。

コザ市を境界都市とみなすならば、基地のフェンスは琉米間のヒトやモノの流れを遮る壁であり、ゲートはその流れを選択的に制御するフィルターである。つまり、ゲートを通して、米兵、軍雇用員、サービス業者、そして関連する物品が日常的に出入りする。支配者たる米軍は、駐留の効率的維持のために、ゲートを用いて軍民・琉米間の相互作用を制御できる。対して、沖縄側は、軍雇用員のストライキのような例以外に、この相互作用を主体的には制御できない。

つまり、軍と民の空間は不均等に接触し、相互作用する。その不均等な作用は、占領期の土地の収奪や（女性）住民への暴行そして軍政下の生活権や人権の侵害としても現れた。この抑圧に対して沖縄の人々は抵抗や闘争を繰り返す。こうして、コザ市は米軍に対する従属と抵抗が錯綜する空間となったのである。

このような異質で不均等な社会関係が交錯する空間は「コンタクト・ゾーン」と呼ばれる。この用語を創出したプラット⁷は以下のように定義する。

植民地主義や奴隷制度、あるいは今日世界各地で生き永らえているその余波のような、しばしば極めて非対称な権力関係の文脈の中で、複数の文化が互いに出会い、衝突し、格闘す

る社会空間。

その具体例としては、交易所、境界都市、人々や商品の移動が接触をもたらす都市などが考えられる⁸。プラットはこうした空間で発生する重要な接触の過程を「トランスカルチャレーション」と表現し、こう説明する⁹。

従属した、あるいは周縁的な集団の成員たちが、支配的な、あるいは大都市の文化によって伝えられた素材から選択し、創作するプロセス。この言葉は、[…]征服下の文化を特徴づけるために使われる過度に還元的な「馴化^{じゅんか}」と「同化」の概念に取って代わることを目的としている。

ここから、コンタクト・ゾーンに生まれる文化は、被征服者による征服者文化からの選択的創作により、ハイブリッド（異種^{こんごう}混淆的）な性格を持つと理解できる。

コザ市を境界都市（コンタクト・ゾーン）として捉えるならば、トランスカルチャレーションは市名の成り立ちに確認できる。上述したように、「コザ」という米軍の誤用による地名が採用されたことは、都市のハイブリット性を示している。また、この地名は米軍が強制したものでも、米軍への同化を意味するものでもないと考えられる¹⁰。

このハイブリッド性は、その後の「コザ」や通りの呼称の揺らぎとしても確認される。

カタカナの「コザ市」は1956年から74年まで市内外で定着していくが、美里村との合併時に採用された「沖縄市」には市民からの賛否両論があった。市名公募では「コザ市」が最多であったものの、対等合併ゆえの政治的妥協や脱基地経済の観点から、土地柄を反映しない市名が採用されたのである¹¹。

さらに、1972年の復帰に伴い、コザ市は「国際文化観光都市」を宣言し、沖縄市もそれを継承する。この宣言は、基地の街に由来する「多彩な国際カラー」を前提に、不安定な基地経済に依存しない「観光、文化、スポーツ」による開発を謳った¹²。翌73年にコザ市は「ゲート通り」を「空港通り」に改称し、嘉手納基地の返還と民間空港化を構想した。その後85年に「センター通り」は「中央パークアベニュー」に改称され、かつての特飲街はアーケード付きの先進的商店街に変貌した。沖縄市は、内陸の旧市域を中城湾へと開き、基地の街からの脱却、つまり「脱・コザ」の戦略に舵を切ったかに見えた。

基地の街の地域再開発戦略 ～脱・コザから再・コザへ

復帰後も米軍基地は沖縄県にとどまったが、ベトナム戦争の終結と復帰後の円高は基地経済を縮小させ、日本政府による沖縄振興開発計画は県内各地の開発を加速させた。その結果、住宅や大規模店

の郊外化による沖縄市の中心市街地の衰退が進んだ。中央パークアベニューは開設時の賑わいを持続できず、1997年にその北端に複合商業施設「コリンザ」が建設される。しかし、店舗の撤退が相次ぎ、2014年に沖縄市が施設を買い取り、現在は沖縄市立図書館などが入る複合施設「BCコザ」となっている。その間、米軍基地の返還はほとんど進まず、1996年のSACO合意にも、嘉手納基地の縮小や返還は含まれなかった¹³。

嘉手納基地の存続と旧コザ市地区（以下「コザ」）の衰退は、国際情勢と日米関係、為替相場、沖縄県政、そして県内経済の変動の結果であり、一地方都市が対処できる問題ではない。しかし、基地返還が部分実現した北谷町などとの再開発の競合もあり、沖縄市独自の開発戦略が模索される必要があった¹⁴。その中で注目されたのが独自の「地域資源」の再発見と開発である。

沖縄市での地域資源開発を促したのは、1997年に開始された「沖縄米軍基地所在市町村活性化特別事業」である。「基地の存在による閉塞感を緩和する」とした政府事業に、沖縄市の「中の町・ミュージックタウン整備事業」（以下「ミュージックタウン事業」）が1999年に採択された。この事業は、嘉手納基地門前の胡屋十字路西側角地において、土地の合理的高度利用、音楽によるまちづくりに資する公共施設の整備等を図り、中心市街地の活

性化を目指した。この事業によって2007年に建設された再開発ビルが「コザ・ミュージックタウン」である。事業の背景は次のように説明された¹⁵。

沖縄市（旧コザ市、旧美里村）は戦後、基地依存経済の下で沖縄本島中部圏の中核都市として発展してきた。基地の門前街として第3次産業に特化していく一方、沖縄の伝統的な地域文化を土台に米軍基地の存在によるアメリカ文化等の影響を受けながら極めて特色のあるイメージを持った街を形成してきた。特に音楽分野においては、戦後復興の大きな心の支えとしながらアメリカンロックやジャズ、琉球古典、島唄、琉球芸能等多様な音楽シーンが盛んな地域として発展してきたが、本土復帰を前後としたドル高の終焉による基地経済の変動とともにかつての音楽関連産業としてのダイナミズムは沈静化し、その求心力が弱まり拡散してきた。

そこで、ミュージックタウン事業が、この「沖縄市独自の音楽・芸能の土壌」という地域資源の潜在力を掘り起こす「音楽と芸能を背景とする街づくり」をけん引するとされた。

上述したように、沖縄市成立時には、脱・コザを目指す上で、米軍基地との歴史的関係は積極的には評価されなかった。対

して、ミュージックタウン事業は、明示的にコザの歴史的、文化的な背景を地域資源とみなし、中心市街地を活性化しようとしたのである。この施設には「コザ」の名称が用いられ、施設開設に先立つ2005年に「空港通り」は「コザ・ゲート通り」と再命名された。これはコザという歴史性や固有性への回帰、つまり「再・コザ」化といえる。この方向性は、「コリンザ」がかつてのビジネス・センター（BC）通りにちなんだ「BCコザ」に改称されたことにもうかがえる。街のブランディングという点では、県名と競合する「沖縄」よりも「コザ」が優位である。ただし、ミュージックタウンも期待された音楽の産業化を達成できず、地域資源を経済的に活用することの難しさを示した。

基地の街の記憶と魅力

こうした一連の再・コザ化の試みは、地名改変や施設建設にとどまらない。境界都市コザに生まれたものを「記憶化」する取り組みも、市役所、NPO、各種団体によって継続されてきた。プラットの定義に従えば、コザは米軍統治という植民地主義的で非対称な権力関係の中で、琉・米・アジアほか多様な文化が互いに出会い、衝突し、格闘する都市空間といえる。そして、この非対称な関係は、文化という精神的なもの、生活様式やその表現にとどまらず、物理的で身体的なものにまで及び、

それゆえに人々の心にも深く刻まれる。そこには、戦争、占領、異民族支配、闘争や抵抗といった、過酷なものが含まれるからである。

コザを語る際、「チャンプルー文化」という表現がよく使われる。「チャンプルー」は主に沖縄固有の混ぜ合わせ料理を意味するが、東アジアに位置する沖縄の文化的混淆を指す言葉としても用いられる¹⁶。しかし、この比喩は、異質なものが混ざり合う過程での衝突や格闘まで意味しない。コザに結果として生まれたハイブリッドなものを称揚するだけでは、コンタクト・ゾーンの歴史的実質を理解することにはなるまい。

また、これまで多くの映画、番組、小説がコザを対象に作られており、SNSが発達する今日、コザを脚色して発信することで、衆目を集めてコザを活性化することも可能であろう。しかし、それは都市像の部分的な切り取りにもなりかねない。コザの内実の「記憶化」は、復帰後50年を経た今でこそ必要であり、この内実から湧き出る「魅力」なら簡単に色あせはしまい。

この「記憶化」に中心的な役割を果たしてきたのが、沖縄市役所の市史編集担当であろう。市史編集担当は、沖縄市制10周年記念事業に伴い設置され、1984年に『沖縄市史第二巻』の刊行を皮切りに、これまで『沖縄

市史』、『沖縄市史資料集』、『KOZAの本』各巻、そして雑誌『KOZA BUNKA BOX』各号などを刊行してきた。

出版事業以外にも、市史編集担当は、戦後文化資料展示室「ヒストリート」（旧館）を中心市街地内（パルミラ通り商店街）に開設し、戦後史（沖縄戦と米軍統治）に関連する物品・写真資料を展示してきた（図2）。2005年に開館した旧館は、2009年に「ヒストリートII」を併設し、2018年にはコザ・ゲート通り沿いに移り、展示スペースを拡充した「ヒストリート」（新館）となった。ヒストリートは、旧館が米軍向け特飲街となった中央パークアベニュー（旧センター通り）に近接し、新館が嘉手納基地門前のコザ・ゲート通りに面しており、展示内容がこれら通りに根付く歴史と関わっている点に特徴を持つ。特に新館には、入館者や通行者に米軍関係者が見られ、訪問者はコンタクト・ゾーンを実感できる。



図2 ヒストリート（旧館）（2012年2月9日撮影）

市史編集担当と「ヒストリート」による「記憶化」の対象は多岐にわたるが¹⁷、征服者と被征服者との間の物理的な衝突・格闘として語りつがれてきたのが「コザ暴動」¹⁸である。復帰を控えた1970年12月20日未明に、米兵が起こした交通事故を契機として、民衆による投石、米軍車両の焼き討ち、米軍施設の破壊がコザで発生した。この「暴動」にまつわる記録や語りは、コザの「記憶化」の重要な要素である。つまり、コザは単に基地のある街を超えて、米軍統治の抑圧と市民の抵抗がぶつかるコンタクト・ゾーンとしても記憶されてきたのである。

この「記憶化」は、市史編集担当による刊行物や展示のみならず、市民レベルでも展開した。特に「暴動」の40周年にあたる2010年に実施された「『コザ暴動』を記録する会」(以下「記録する会」)が果たした役割は大きい。記録する会は、まちづくりNPOの幹部(当時)が主宰し、市史編集担当が証言記録その他の調整を行った。証言者は主宰者含めて22名で、ほぼ全員が1970年当時コザに居住していた。証言会場の「ヒストリートⅡ」にはまちづくりNPO、観光協会、メディアの関係者を含む延べ50名の聴衆が集まった。これら証言と聴衆のコメントを分析すると、発言内容には大きく三つの傾向があることがわかった¹⁹。

一つ目の傾向は「暴動の再評価」である。これは、証言者が「暴動」を肯定的に評価し、「ウチナーンチュ」としての誇り

の感覚に結びつけ、「秩序ある暴動」という表現によって暴力が自律的に抑制されたことを強調する傾向である。

二つ目は「境界都市の社会空間的構成」に関わる語りである。この傾向は、証言者が境界都市としてコザを表現する様式を示している。コザの社会的構成については、基地のフェンスやゲートで隔てられた社会の交錯から発生する「ハーフ差別」や米軍による日常的な抑圧と琉米間の共生が強調される。一方、空間的構成については、「暴動」が「第2ゲート」、「島袋三差路」、「センター通り」まで拡大しつつも、いずれの場所でも琉球警察、米軍警備隊、特飲街の自警団リーダーらによって進行を阻まれ、「暴動」も限られた民の空間内で展開していたことが確認された。

最後は「暴動検証の意義」という傾向で、証言者や聴衆が「コザ暴動」の歴史的意義とコザ再生に向けての歴史検証の重要性に言及し、基地問題など沖縄県やコザを取り巻く状況に対して、コザ住民の主体性やアイデンティティを再構築する必要性を強調していた。要するに、「記録する会」の試みは、境界都市としてのコザの特質を再確認し、沖縄社会の現状への住民の理解を促し、地域資源(対外的魅力)の再発見へと展開したと考えられる。

「記録する会」に続く「コザ暴動」45周年には「コザ暴動プロジェクト」という写真展が開かれた。2015年から16年にかけて、「暴動」に関する写真展と撮影した写



図3 「コザ暴動プロジェクト in 大阪」ギャラリートーク
(2016年12月18日撮影)

真家自身のギャラリートークからなるイベントが、沖縄市(コザ一番街)、東京(明治大学)、大阪(大阪市立大学)で連続開催された。筆者は2016年の大阪での開催をホストし、3日間で延べ160人を上回る参加者を得た(図3)²⁰。このように「暴動」を通じたコザの「記憶化」は、沖縄市(コザ)を超えて広がり、50周年にはNHKが特集番組を放映するなど²¹、全国に展開した。

こうした試みは、地域資源の開発や都市プロモーションというよりも、コザの歴史的、地理的な基底に人々の心に訴える何か—コザ的なもの—を見い出し、伝え、残そうとする地元内外の人々の飽くなき努力のように筆者には感じられた。

境界都市の精神

文化人類学を中心とするコンタクト・ゾーンの研究には米軍基地を対象とするものが

少なくない²²。コザでも、トランスカルチャレーションは地名、文化、産業、景観、人的関係に至る多くの局面で確認できるが、人々を魅了する「コザ的なもの」をどう見出し、表現できるのであろうか。プラットが述べるように²³、コンタクト・ゾーンには、交錯する複数の文化や社会集団

のいずれにも完全には属さないものが生み出される。この過程は摩擦を伴うが、そうした「もの」は既存の文化や規範を覆す潜在力を持つと考えられる。

筆者がコザを境界都市とみなしたのは、ミンカによるトリエステに関する論稿の翻訳がきっかけである²⁴。トリエステはイタリア北東部に位置し、アドリア海に面する港湾都市で、スロベニアと国境を接する境界都市でもある。第一次世界大戦までオーストリア=ハンガリー帝国の統治下にあり、ウィーンの外港として繁栄した。第一次世界大戦後にイタリアに領有されるが、第二次大戦でナチス・ドイツの侵攻を受け、続いてユーゴスラビアのパルチザンが侵攻し、英米軍もトリエステに進撃した。戦後、トリエステは国連の監視下に置かれ、イタリアとユーゴスラビアとの間で帰属紛争もあったが、1954年にイタリアに返還される。

トリエステは帝国の自由港湾都市として、多様な民族²⁵からなるコスモポリタンな社

会を形成し、独自の「トリエステ人」という市民アイデンティティが構想された。しかし、帝国解体後のトリエステは、その多民族性ゆえに、周辺国家の対立関係の中で、特定の国民国家へ編入されるたびに、民族別に引き裂さかれてもきた。ミンカは、こうした領土編入がコスモポリタンな都市性を何度も減殺させたという²⁶。それでも、今世紀に入って、トリエステのコスモポリタンの伝統は、中央ヨーロッパにおけるユーロリージョン²⁷の形成と関連して議論され続けている。

トリエステの境遇はコザとは異なるが、似通う部分もある。境界都市の民族的混雑^{こんさつ}から生まれるコスモポリタンな性格は、コザの戦後史にも見出すことができる。つまり、コザでは、米軍という強力な他者²⁸に加え、収容所から解放された島内各地の出身者、先島^{さきしま}や奄美の出身者、米国籍でない軍属、基地経済に引き付けられた女性や外国籍住民など、戦争、占領、基地と関わる多様な人々が、出会い、衝突し、格闘してきた。しかし、この交錯がどのような都市の精神を創り出してきたかは十分に解明されていない。また、植民地的郷愁に浸ることなく、トリエステのように、都市の歴史的、社会的背景から、コザ独自の精神性を未来に向けて育んでいくことも可能であろう。

おわりに

最後に、沖縄市（コザ）の歴史と経験

から、本土の人々が学ぶうる「平和」について述べておこう。コザは、多大の犠牲者を出した沖縄戦を経てもなお、新たな戦争に備え、駐留・出撃する米軍を後方支援してきた。この歴史が示すのは、戦争なき「平和」でも、軍事力によって維持される「平和」でもなく、自分たちではない誰かの「平和」のために課される負担や苦悩であった。この不条理に身体や環境の犠牲が伴うのであれば、何かで相殺することはできない。

筆者は、こうした「遠くの誰か」の負担や苦悩によって与えられた戦後の「平和」―日米安保体制―に安住してきた一人である。こうした筆者へのコザからの問い返しとは、「支える主体なき『平和』は欺瞞ではないか」、「『平和』の維持に伴う負担を担えるのか」という声なき問いである。筆者は未だにこれらの問いには答えられない。

しかし、この不条理の中で、沖縄（コザ）市民は、戦後にゼロから生活を築き、基地の街を発展させ、かつ基地の抑圧に抵抗してきた。そうして生まれた境界都市では、米軍に完全には馴化^{じゅんか}せず、敵対的な二分法を止揚して、異質なものに開かれた社会が築かれてきたと信じたい。筆者にできるのは、不条理の中で築かれたであろうコザの精神性とその普遍性を探り続けることである。

- ※1 津野武雄「与えられた地名・コザ」『KOZA BUNKA BOX』第2号、2000年、28～33頁。
- ※2 沖縄県渉外部『沖縄の米軍基地』沖縄県渉外部基地渉外課、1975年、46頁。コザ市『コザ市史』、1974年、862頁。同時期のコザ市の人口は68,536人である（同上『コザ市史』863頁）。
- ※3 Gillem, Mark L. *America Town: Building the Outposts of Empire*. University of Minnesota Press, 2007.
- ※4 サック、ロバート・デヴィッド（山崎孝史監訳）『人間の領域性―空間を管理する戦略の理論と歴史』明石書店、2022年。
- ※5 山崎孝史「戦後沖縄の境界・領域と政治行動―領土の分離・統合と闘争のイデオロギー」『史林』90巻1号、179～209頁。
- ※6 Sparke, Matthew. 'Borderlands.' In Gregory, D., Johnston, R., Pratt, G., Watts, M., and Whatmore, S. eds., *The Dictionary of Human Geography*. Wiley-Blackwell, 2009, p. 53.
- ※7 Pratt, Mary L. 'Arts of the Contact Zone.' *Profession* 1991, 1991, p. 34.
- ※8 Oxford University Press. Contact zone. In Oxford Reference. (<https://www.oxfordreference.com/display/10.1093/oi/authority.20110803095634533>)
- ※9 前掲 'Arts of the Contact Zone.' p. 36.
- ※10 前掲「与えられた地名・コザ」。
- ※11 「デッカク名付けた『沖縄市』」『琉球新報』1974年12月14日夕刊3面。
- ※12 コザ市『コザ市報』第148号、1972年、2頁。
- ※13 防衛省「SACO最終報告とは」(https://www.mod.go.jp/j/approach/zaibeigun/saco/saco_final/index.html)
- ※14 山崎孝史「軍事優先主義の経験と地域再開発戦略―沖縄「基地の街」三態」『人文研究』第59号、2008年、71～96頁。

- ※15 沖縄市建設部振興開発室中の町再開発課「中の町A地区第一種市街地再開発事業 中の町・ミュージックタウン整備事業」(未公刊)、2007年、2頁
- ※16 琉球新報社編集局『復帰後全記録 現代沖縄事典』琉球新報社、1992年、195頁。
- ※17 沖縄市戦後資料デジタルアーカイブWeb ヒストリート参照 (<https://www.histreet.okinawa.jp/histreet/FAA10/init#gsc.tab=0>)。
- ※18 当時のメディアの表現や後世の評価ではなく、地元で語り継がれてきた言葉として「コザ暴動」を用いる。
- ※19 山崎孝史「軍民境界都市としてのコザ―暴動の記憶とアイデンティティ」谷富夫・安藤由美・野入直美編著『持続と変容の沖縄―沖縄なるものの現在』ミネルヴァ書房、2014年、218～242頁。
- ※20 山崎孝史編『軍事的圧力に抗う文化的実―沖縄とパレスチナにおける地誌編纂と景観修復』平成27・28年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)報告書、2017年、第4章参照 (<https://polgeog.jp/wp-content/uploads/2017/09/chap4.pdf>)。
- ※21 NHK ETV 特集「沖縄が燃えた夜―コザ騒動50年後の告白」2020年12月19日放映。
- ※22 例えば、田中雅一・船山徹編『コンタクト・ゾーンの人文学 第1巻―Problematic／問題系』晃洋書房、2011年、第Ⅲ部所収論文参照。
- ※23 前掲 'Arts of the Contact Zone.'
- ※24 ミンカ、クラウドディオ（山崎孝史監訳）『「トリエステ人」とその非現前の地理』『空間・社会・地理思想』第16号、2013年、111～127頁。
- ※25 イタリア系を主流としながらも、スラブ系、ゲルマン系の住民が混住した。
- ※26 前掲『「トリエステ人」とその非現前の地理』。
- ※27 ヨーロッパの国境を超えた地域間協力の枠組み。
- ※28 実際には多様な人種からなる集団であった。

筆者：山崎孝史

1961年京都市生まれ、京都大学大学院修士課程、コロラド大学大学院博士課程修了(Ph.D)。2001年より大阪市立大学(現大阪公立大学)文学研究科に着任。現在は大阪公立大学教授。専門は政治地理学、沖縄研究。

